

# 子どもの生活を支える

## 学童保育指導員の仕事

「パート」では果たせない、指導員の役割

学童保育の役割は、子どもたちの放課後の生活を支えることを通じて、親が安心して働くことを保障することです。「子どもの生活を保障する」とひと口に言っても、そこには子どもたちの思つかいがあるふれています。豊かな学童保育の生活を保障するためには、「安全で衛生的な施設」と「指導員の援助」が欠かせないのです。

限られた紙面ではありますが、市内のある学童保育の実践をご紹介します。

### ●一年生が学童保育にやってくる

私が指導員になって、一年生を迎え入れたのは今年で三回目になります。保育園・幼稚園児だった子どもが、四月一日から学童保育に来るわけですから初日から大騒ぎです。今年は一日から全員がそろいました。

私は不安も入り交じりながら、わくわくしていました。



### ●上級生との関わりの中で

新入生のAちゃんはおしゃべりが大好きな女の子。ランドセルが歩いているように見えるほど小柄なかわいい一年生です。四月に入所してからしばらくはとても楽しそうで、いろいろなことに興味を持って遊んでいました。

ところが、半月もすると、学童保育でしくしく泣いたり、学校からの帰り道に自分の家の方に向かって帰ろうとしたことがありました。その理由には、新学期の疲れなどいろいろ考えられました。その中に四年生のBちゃんとのかわりがあったようでした。

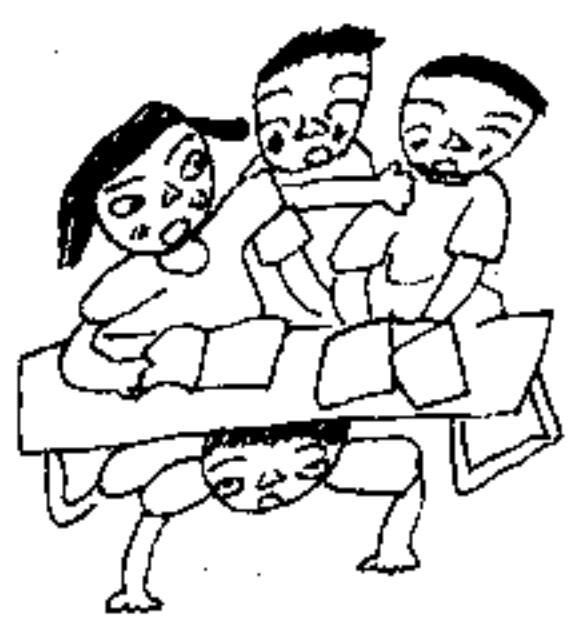
BちゃんはAちゃんを鉄棒遊びに何度も誘っていました。一見楽しそうに見えたのですが、後になってAちゃんは「私、本当はBちゃんと遊びたくなかった」と訴えにくるようになりました。私が、「嫌なら断ればよかったのに」と言うと、「だって嫌だって言えないの」と困った様子でした。

Bちゃんは上級生ということもあって、下級生の面倒をよく見てくれます。しかし、Bちゃんの口調は時おり強くなるため、Aちゃんはそ

れを叱られていると受け止めていたようでした。

Bちゃんに悪気がないことは彼女のそぶりからよくわかっていましたが、AちゃんにとってBちゃんは怖い存在になっていたのです。

子どもたち同士の関係は、自分たちでつくることに越したことはありません。しかし、Aちゃんにとって、このことが目の前の「壁」のひとつになっていくのです。こんな二人のかかわりが気になっていたやさきのことでしたから、ここは指導員として援助する必要があると感じて、場面をとらえて何度か二人と話をしました。相手に感じていることを少しずつ出し合いながら、お互いが分かり合えるように。BちゃんはAちゃんに対する接し方を少しずつ変え、Aちゃんもそれほど気にすることがないようになっていくきました。



### ●お母さんと話し合う

学童保育での様子を心から心配されているお母さんと、Aちゃんのことと何度かお話をしました。

七月のある日の話で、いろいろな事情で小さい時はほとんど叱ったことがなかったが、これではいけないと途中から叱ることも必要ではと思うようになったことなど、Aちゃんの小さい頃の子育てについて話をして下さいました。

いろいろなお話から、我が子のことを心配しているお母さんの気持ちが、むしろAちゃんに

(ウラへ続く)

(オモテから)

とって過ぎたことになっていないのだろうかという感想を持ちました。しかしまだ経験の少ない私が、お母さんのこの気持ちを本当に理解できるのだろうかという思いが心をかすめました。

最後に「話を聞いていただいております。ありがとうございます」と言われたお母さんの一言が、私の気持ちを少し楽にしてくれました。



### ●宿題ができない

その後、Aちゃんのお母さんから「学童保育で宿題をやってこなくて困っている」という話を聞きました。一つ一つに時間がかかり、時には夜中までかかることがあるというのです。「宿題」は基本的には、家庭で内容を把握するものです。しかし、仕事を持つ家庭の親子の時間はとてもあわただしく過ぎていくのが現状です。ですから、子どもの実態に合わせて学童保育と家庭が連絡を取りながら、宿題の時間を保障する必要があると思うのです。

Aちゃんに「どうして宿題を学童保育でやらないの？」と聞きました。初めはもじもじしていたAちゃんでしたが、覚悟を決めたらしく、「周りの人が、どんどん終わっていくのに、Aはわからないから終わらないの…。みんな見ているから恥ずかしい」と小さな声で教えてくださいました。私の学童保育は五〇人以上の子が生活しています。一日の流れの中に宿題の時間をとっているものの、一人一人の内容まで見るのは難しいのですが、私は明日から一緒にやることを約束しました。次の日、約束どおり見てあげると、時間はかかるが、内容はきちんと理解しているようでした。AちゃんにはAちゃんのペースがあるのです。

次の日は自分から「一緒にやろう」と宿題一式をもってきました。何日か過ぎる中で、いつの間にか、みんなと一緒に宿題がやれるようになりました。Aちゃんにとって、「きっかけ」が必要だったのです。

### ●友だちの輪が広がって

その後、いろいろなことがありました。

今、Aちゃんはとても面白くひょうきんな四年生のC君のことが気になっていっている様子。おやつや掃除の時はいつも楽しそうな笑いの絶えない雰囲気です。かといって、Bちゃんとも仲良く遊んでいます。

「最近楽しい？」と聞くと、「うん、C君大好き！すごい楽しいよ」と元気に答えてくれました。

入所して十ヶ月。泣くこともなくなり、自分の意見も大分はつきり言えるようになってきました。ようやく、Aちゃんの居場所が見つかったのです。

Aちゃんは四月には二年生。これからどう成長していくのかとても楽しみです。

子どもが生活環境を自分の世界として作り上げていくには時間がかかります。そして、そこにたどり着くためには大人（指導員と父母）の支えが必要なのです。

とりわけ学童保育の場合、子どもが元気に通ってこそ親が安心して働ける条件となります。子どもの生活に直接関わる指導員の責任を、年数を重ねることにひしひしと感じているところです。



NO.14 1999年2月4日

公設公営で私たちのぞむ学童保育を

船橋市学童保育連絡協議会

船橋市学童保育指導員労組